

令和元年6月16日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20800

研究課題名（和文）社会的に孤立した高齢者への効果的なアウトリーチ活動のためのアセスメント指標の開発

研究課題名（英文）Development of an assessment scale for effective outreach activities for socially-isolated elderly people

研究代表者

神崎 由紀 (KANZAKI, Yuki)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：80381713

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高齢者の社会的孤立の防止を目指し、看護職によるアウトリーチ活動のためのアセスメント指標を開発することを目的とした。地域包括支援センターに勤務する看護職を対象に面接調査を実施した。結果、看護職が把握している高齢者は、完全には社会から孤立している状態ではなかった。看護職は、地区組織からの報告や看護職自身が行った観察から、生活の範囲や他者との関係、健康状態を把握していた。高齢者本人の気質や価値観を十分理解した上で「今までとは異なる変化」を体調や表情、会話の頻度や長さ、支援を受け入れる姿勢や他者との交流の範囲などから見極め、支援の必要性をアセスメントしていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護職は、高齢者を見守る地域の組織（自治体や協力員、近隣住民）からの報告や直接的な関わりから、生活の範囲や他者との関係、健康状態などを把握しアウトリーチ活動につなげていた。アセスメントは、活気やふらつき、体調、表情の変化、理解する力、会話の頻度や長さ、支援を受け入れる姿勢、服の着方や選び方、生活する範囲や生活リズムの変化、他者との交流範囲や交流相手の好み方に焦点を当てていることが明らかとなった。以上のことから、これらの視点を踏まえたアセスメントの必要性が示唆された

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an assessment scale for nursing outreach activities, with the goal of preventing social isolation among the elderly. Nursing staff at the Local Elderly Care Management Center were interviewed. Based on the results of these interviews, as far as the nursing staff were aware, the elderly in the area were not completely isolated from society. The nursing staff were aware of the scope of the lifestyles, relationships with others, and health status of the elderly in their area through reports from local organizations and their own observations. The study found that the nursing staff used their understanding of the temperament and values of the elderly in their area to watch for changes from the way things were until now in terms of factors such as physical condition, emotions, frequency and length of conversations, attitude toward receiving assistance, and scope of interactions with others, using these signs to assess need for care.

研究分野：地域看護学

キーワード：社会的孤立 高齢者 アウトリーチ

1. 研究開始当初の背景

高齢者の社会的孤立の研究は、1950年代にイギリスの社会学者ピーター・タウンゼントが孤独の概念と区別し、客観的な概念として定義したことに始まる¹⁾。先行研究の多くは、この定義に準拠し、社会的孤立を他者との接触頻度を基準として判断している。先行研究では、高齢者の社会的孤立の要因として、社会的・環境的要因や身体的・精神的要因、また、性別や年齢の高さ、緊急時の支援者が不在なことが報告されている。この社会的孤立は、生きがいの喪失や孤立死、高齢者の犯罪や詐欺被害など社会的課題に発展する可能性が指摘されており、孤立を防ぐことは地域生活を支援する上で重要な課題の一つである。社会的孤立の予防策として、日中の居場所づくりや見守りネットワーク体制の構築が報告されている。各地域で実践されている取り組みの課題は、1. 孤立する可能性がある高齢者の孤立予防である場合が多い。しかしながら、社会的孤立の要因には認知機能の低下やうつ症状があり、2. すでに孤立している高齢者は他者との接触を拒む傾向があるため、その実態を把握し支援することが難しい。そのため、社会的孤立から生じる生きがいの喪失や孤立死、高齢者犯罪や詐欺被害を受けるなどの社会的課題を防ぐためには、3. 孤立している(あるいは、孤立の傾向にある)高齢者を対象として予防的に支援することが課題である。日本政府は、健康状態や経済的状态に問題を抱えながら、必要なサービスを受けずに孤立している高齢者の孤立を防ぐことが課題だと示している²⁾。社会的に孤立した高齢者は、生活上の課題があるにもかかわらず、支援を求めない、あるいは支援につながりにくい人であり、潜在化しているニーズを支援者側が判断し、必要な支援につなげること(アウトリーチ活動)を必要とする対象者だといえる。

高齢者の社会的孤立への支援は、看護職だけではなく地域の支援体制の中で行われる必要があるが、支援を受けることに消極的な高齢者の特徴から、地域の支援体制につながるまでに時間を要する場合がある。看護職は、地域の支援体制につながる前からこうした高齢者を支援しているが、この支援は看護職の裁量に任されているという実態がある。高齢者の孤立の防止に向けた効果的な支援を検討するためには、地域の支援体制につながるまでの時期に、高齢者を予防的な視点で把握し、潜在化しているニーズを判断し、必要な支援につなげる(アウトリーチ)活動をする看護職が、高齢者の状態や支援の必要性について効果的にアセスメントできる指標を検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢者の社会的孤立の防止をめざして、社会的に孤立した高齢者の状態や支援の必要性について身体的、精神的、社会的側面から明らかにし、看護職のアウトリーチ活動のためのアセスメント指標を開発することである。

3. 研究の方法

1) 研究方法

(1) 高齢者の特徴分析; 先行研究データの二次分析から得られた結果及び文献検討の結果から、社会的に孤立した高齢者の特徴を解明し、彼らを支援する看護職へのインタビューガイドを作成した。

(2) 社会的に孤立した高齢者を支援する看護職への面接調査; 本研究は、社会的に孤立している高齢者を担当し、継続的な支援の経験を有する看護職を対象とした。調査協力は、関東甲信越地域の地域包括支援センターに3年以上の勤務経験がある看護職へ依頼した。

2) 調査内容

(1) 研究協力者に関すること; 看護職として勤務した全経験年数、地域包括支援センターでの経験年数、担当する地域の高齢化率、勤務する地域包括支援センターの設置形態。

(2) 社会的に孤立した高齢者への支援; 社会的に孤立した高齢者へのアウトリーチ活動による支援の必要性を判断する際、特に着目している観察点はどのようなところか。担当する地域での社会的に孤立した高齢者の人数と高齢者の状態。看護職が社会的に孤立していると判断して支援する場合、どのようなことに注目して観察しているか。また、観察して得た情報から、高齢者の状況や支援の必要性について、何に着目して判断しているのか。

3) データ収集方法

インタビューガイドに基づいた半構造化面接を行い、その内容は、許可を得てICレコーダーに録音した。

4) 分析方法

録音した面接内容について、逐語録を作成した。分析は、看護職の観察とアセスメントについて、身体的、精神的、社会的視点に焦点を当てて分析した、まず、アウトリーチ活動で着目した観察の視点とその判断に関する文脈を抽出し、その意味内容を表す言葉でコード化した。身体的な視点、精神的な視点、社会的な視点については、それぞれのコードを分類して取り扱った。各コード間の類似点と相違点を確認しながら、類似するコードを集め、その意味内容を表す言葉でサブカテゴリ化した。さらに、サブカテゴリを類似性と相違性に考慮しながら、その意味内容を表す言葉でカテゴリ化した。

4. 研究成果

(1) 高齢者の特徴

先行研究のデータから、看護職が支援する社会的に孤立した高齢者4,595人の状態を、年齢、性別に分類しデータ解析した。質問紙調査に協力した看護職が支援する社会的に孤立した高齢者のうち、前期高齢者は20.5%と少ないものの、その75.4%について看護職は、認知機能の低下を判断し支援していた。また、女性は全体の60.7%と多く、その57.5%は生活機能の低下であった。男性では、70.2%の身体機能の低下を判断して支援していることが明らかとなった。さらに、ひとり暮らしの高齢者は、全体の56.1%であった。このことから、アセスメント指標を開発する上で、高齢者の属性を考慮していく必要性が示唆された。また、看護職が社会的に孤立していると判断し支援している前期高齢者の66.0%、後期高齢者の45.8%、女性の52.0%、男性の61.1%が、「まだ、(自分は)大丈夫だという自信がある」と思っていると判断できる特徴があり、アウトリーチ活動を効果的に行っていくためには、対象者の前向きな気持ちや、新たな人との関係を築くことが難しいといった対象者の特徴を、適切に判断し考慮していく必要性があることが示唆された。

(2) 社会的に孤立した高齢者を効果的にアウトリーチしていくためのアセスメントの視点

関東甲信越地域の地域包括支援センターに勤務する看護職4名から本研究に関するデータが得られた。

看護職が支援する背景；本研究では、社会的に孤立した高齢者への看護職による支援に焦点を当てているが、看護職が担当者として把握できている(看護職と繋がっている)高齢者への支援内容を調査の対象としているため、完全に社会から孤立している状態の高齢者はほとんどいなかった。また、高齢化率が約50%の過疎化が進む地域では、人口が少なく地域包括支援センターを自治体で運営しているため、看護職の経験年数も長くなることから、看護職が住民の状況を全て把握することが出来ていた。具体的には、住民同士の親しさ(交友関係)や近所づきあい、親戚や通院先などの状況を把握しており、高齢者の体調の変化については、近隣住民からの情報によって保健師が把握し支援している実態が明らかとなった。高齢者の社会的孤立への支援を検討する際、高齢化率の高さだけに注目するのではなく、地域の人々のつながりや助け合い、他者への関心や住民の助け合う文化や歴史など、地域性に考慮して検討していく必要性が示唆された。

さらに、看護職が直接的に支援するだけでなく、高齢者を見守ることができる地域の組織(自治体や協力員、近隣住民)を育成し、支援することで、観察力やコミュニケーション力の高い地域をつくり、その力を活用していることが明らかになった。

効果的なアウトリーチ活動のための視点

看護職が社会的に孤立した高齢者をアウトリーチする手段としては、看護職が直接担当し、支援することと同時に地域の組織活動を活用していることは前述した。地域の組織活動からの報告から、生活の範囲や他者との関係、健康状態や社会的反応など、様々な視点から、『気になる』高齢者として把握していた。看護職が直接支援していく場合のアセスメントの視点として、以下の6カテゴリが抽出された。

「健康の自己管理状況」；内服自己管理の状況、睡眠不足、受診行動(医療の受け方)、食事摂取状況

「体調の変化」；健康状態(体調、表情、活気)、検査結果、歩行状態(ふらつき)

「理解する力の変化」；認知機能、理解力、支援を受け入れる姿勢(頼り方・断り方)

「他者とのつながりの変化」；友人との会う頻度、内容、他者との交友の範囲、生活歴

「コミュニケーション力の変化」；会話の内容(繰り返し、時間、まとめ)、視線、身振り

「日常生活における行動の変化」；生活時間・生活行動の変化、洋服の着方・選び方(身なり)

また、特に看護職は、それぞれのアセスメントの視点について、『今までと異なる変化』から生じる生活状況を見極め、支援の必要性を判断していた。以上のことから、これらの視点を踏まえたアセスメントの必要性が示唆された。

<引用文献>

1) Townsend, P. Chapter 13 Isolation, loneliness, and the hold on life. The Family life of old people. (pp.188-205). England: Penguin books. (1957).

2) 総務省. 高齢者の社会的孤立の防止対策等に関する行政評価・監視結果に基づく勧告. (2013).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

〔学会発表〕(計 1件)

1) Yuki Kanzaki, Emiko Saito, Characteristics of socially isolated community-dwelling older adults receiving nurses' observant care, The 7th International Conference on Community Health Nursing Research, University of Kent, UK (2016).

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。